

歴史体験—団体利用のご案内

歴史資料館では、大むかしの人びとの生活を体験できるいろいろな活動メニューがあります。

これらの歴史体験活動は学校のPTA活動、家庭教育学級、地域の子ども会、児童育成クラブなど団体でも利用できます。活動時間、参加人数などに応じて、いくつかのメニューを組み合わせることもできます。

各種団体での体験活動をご希望の場合は、歴史資料館へご相談ください。

体験活動	活動時間	活動内容	材料費
1 火起こし	40分	古代の弓ぎり式による火起こし体験	無料
2 勾玉作り	1.5時間	かつ石を使って勾玉を作ります	1個 190円
3 管玉・丸玉作り	2時間	かつ石を使って古代のアクセサリー管玉と丸玉を作ります	5個セット 250円 3個セット 190円
4 はにわ作り	2時間	粘土で人物はにわを作ります	1個 210円
5 土笛作り	1.5時間	粘土で古代の楽器、土笛を作ります	1個 50円
6 明るさ体験	30分	火打ち石を使って火をつけます	無料



人物はにわ 勾玉



火起こし

インフォメーション Information

ふれあい歴史体験講座

- 実施日と内容** 2月24日(土) 管玉・丸玉作り
3月24日(土) 粘土はにわ作り
- 時間** 9時30分～/14時～(各回約2時間)
- 参加費** 管玉・丸玉 5個セット 250円
3個セット 190円
粘土はにわ 1個 210円
- 定員** 各回70名(先着順)
- 申し込み** 電話でお申し込みください。
2月8日・3月7日より受け付けます。

テーマ展解説講座

- 内容** 講座室でテーマ展「西寒多神社—所蔵文書を中心に」についてスライドなどで解説したのち、展示室をご案内します。
- 日時** 2月25日(日) 14時～15時30分
- 講師** 歴史資料館職員
- 参加費** 展示をご覧になる場合は観覧料が必要です。

ミュージアム・シアター

- 実施日** 2月25日(日) 文字の普及—近世の技術と生活
木組みの技
3月25日(日) 有明海の干潟漁/桂離宮
- 時間** 13時～14時
- 料金** 無料
- 申し込み** 不要

利用案内

- 開館時間** 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日** 毎週月曜日(祝日の場合は開館)
ただし、毎月第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館
(祝日の場合は開館)
- 祝日の翌日(土・日曜の場合は開館)
年末年始(12月28日～1月4日)
- 観覧料** 大人200円(団体150円) 高校生100円(50円)
※団体は20名以上、中学生以下は無料
※特別展開催中は別料金となる場合があります。
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。受付で手帳を提示してください。
- 住所** 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL097-549-0880



大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol. 78
2007.2.3



大分市歴史資料館 テーマ展示Ⅳ
西寒多神社—所蔵文書を中心に
2月3日(土)～4月1日(日)

トピックス
歴史体験—団体利用のご案内

大友松野家伝来「音無の轡」

さ さ む た じ ん じ ゃ

西寒多神社

— 所蔵文書を中心に

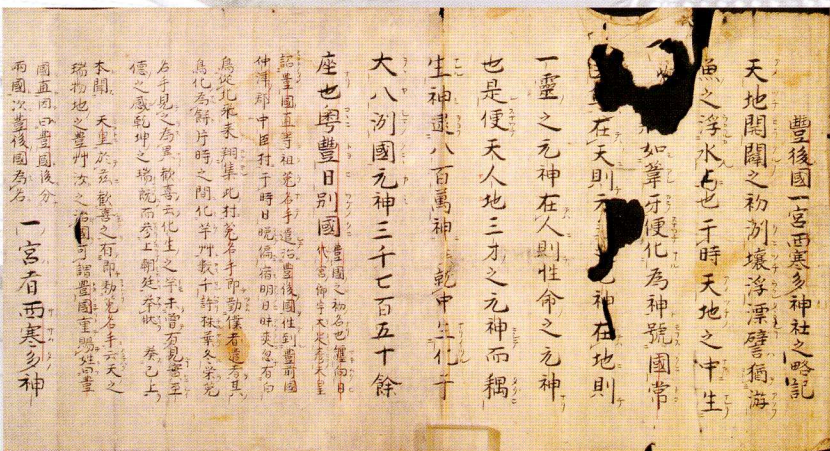
会期:平成19年2月3日(土)~4月1日(日)

西寒多神社の歴史

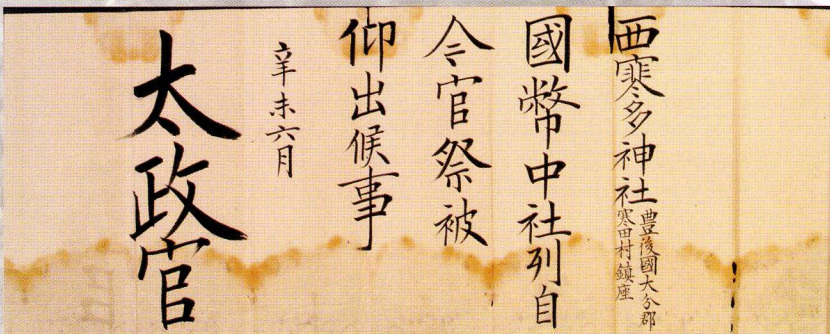
初め本宮山の山頂にあったといわれる西寒多神社が初めて歴史に登場するのは平安時代の869年のことです。この年3月、位を持っていなかった西寒多神社に朝廷から「従五位下」が与えられました。これ以前の850年に朝廷は全国の神社に位を与えるよう命じていました。西寒多神社がこの時点で創建されていたなら、当然位をもらったはずですが、869年まで無位だったのですから、神社は851年から869年の間に創建されたとしか考えられません。位をもらった西寒多神社は急速に社格を上昇させ、884年ころ作成された、朝廷や国の役所がお祭りする神社を書き上げた「延喜式神名帳」に豊後国内唯一の「大社」と記載されています。同社が「豊後一宮」と称される一因がここにあります。

平安時代後半以降の姿は今ひとつはっきりしません。本宮山から現在地に移転したのが1408年、豊後国守護大友氏10代親世によると伝えられていることからすれば、「神名帳」に記載された格の高い神社として大友氏からも手厚く保護されていたようです。

明治時代、新政府は日本古来の宗教である神道を重視する政策を打ち出し、1871年新しい社格制度を設けました。ここで西寒多神社は「国幣中社」に列せられました。1946年にこの制度が廃止されるまで宇佐神宮（官幣大社）に次ぐ県内第2位の社格を持つ神社でした。



豊後国一宮西寒多神社之略記 享保3年(1718)
当時の官司佐藤家長が西寒多神社の歴史をまとめた記録。冒頭に「豊後国一宮」とあり、江戸時代から一宮と称されていた。



太政官列格通達書 明治4年(1871)
明治新政府が西寒多神社を国幣中社に列した公文書

西寒多神社は寒田川沿いに鎮座し、石造アーチ橋の万年橋（県指定文化財）やふじ祭りなどで有名です。その歴史は古く、神社の創建は平安時代前期にさかのぼります。

神社の格は平安時代から高く、「延喜式神名帳」に掲載された豊後国の6つの神社の内、唯一「大社」とされています。明治4年(1871)に新しく定められた社格制度では、「国幣中社」に列せられ、大分県内では宇佐神宮に次ぐ第2位の格式をもつ神社でした。

このような西寒多神社には神社の縁起や絵図、大友家ゆかりの古文書や遺品など貴重な資料が数多く伝えられています。これらの資料を展示し、西寒多神社の歴史を紹介します。

西寒多神社形容姿勢図

西寒多神社の境内と本宮山頂にあるお社を描いた絵図。境内には神殿・拝殿・炊殿をはじめ、麦わら草の神楽殿・神子屋・舞台・社務所などがありました。社務所の注記には清原宣道の自宅を仮社務所にしているとあります。清原宣道は1873(明治6)年6月から1875(同8)年3月まで権宮司を務めており、この絵図はその間の様子を描いていると考えられます。1869(明治2)年に延岡藩が行った神社調査の際大宮司が提出した文書に、当時境内に本社(神殿)・拝殿・神楽殿・御炊殿・神子屋・本地堂があり、この度本地堂を取り除いたと記されています。その文書には各建物の大きさも記されており、その寸法とこの絵図の表記は完全に一致します。このことから、この絵図に描かれた舞台と社務所を除く神殿以下の建物は江戸時代末ころの状況を伝えていると考えられます。また、絵図が描かれたころには境内隣接地の寒田川沿いに酒屋があったこともわかります。

本宮山のお社は西寒多神社がもともと山頂にあったことから、現在地に遷った後現在も「本宮」として信仰されています。

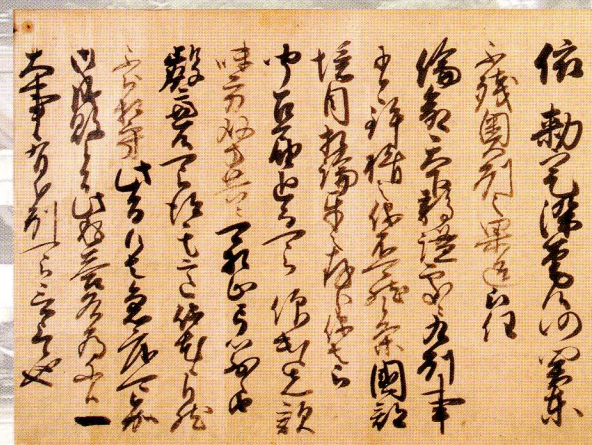


西寒多神社に伝わる大友松野家文書

西寒多神社には守護として鎌倉時代から戦国時代までの約400年間豊後を支配した大友氏の分家にあたる松野家に伝わった古文書と遺品が残されています。

1593年大友宗麟の長男で22代当主大友義統は豊臣秀吉により豊後国を没収され、豊後大友氏の歴史は幕を閉じました。義統の長男義乗は徳川家康に預けられ、二男正照は分家し、細川忠興の家臣となり、松野氏を名乗るようになったのです。松野家の祖正照が大友家から分家した際に父義統から譲られた古文書と思われるのが、大友松野家文書です。

明治時代初め、松野氏の末裔は文書や遺品とともに当時の大分町に移住してきました。そして、1886年上京するにあたり、当時建設が計画されていた「大友祖霊社」完成のあかつきに宝物として神社に奉納してもらうため文書と宝物を地元の有志に預けたといいます。しかし、「大友祖霊社」は建設できず、松野家の文書と宝物の管理は宙に浮いてしまいました。その後の詳しい経過はよくわかっていませんが、1923年当時南庄内村(由布市)の森山家に質入されていた大友松野家伝来の文書と遺品の一部を有志が買い取り、西寒多神社に奉納したのです。遺品の一部は残念ながら焼失してしまったものもあるようですが、文書は今でも大切に保管されています。それらは地元大分に残る大友氏の歴史を雄弁に物語る貴重な文書といえるでしょう。

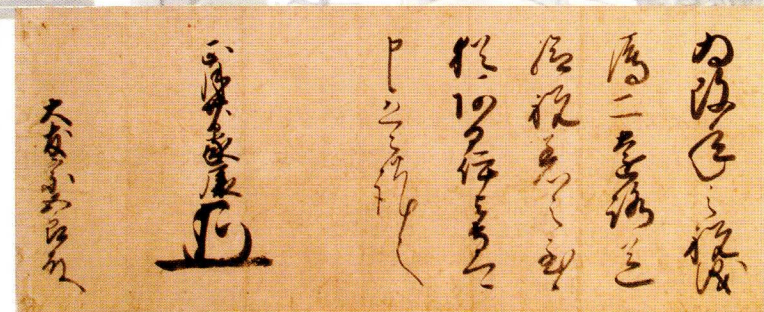


豊臣秀吉直書写 関白豊臣秀吉が、大友氏と島津氏の戦争の即時停戦を命じた文書の写。島津氏はこれを受け入れず、秀吉による九州平定のきっかけとなった。

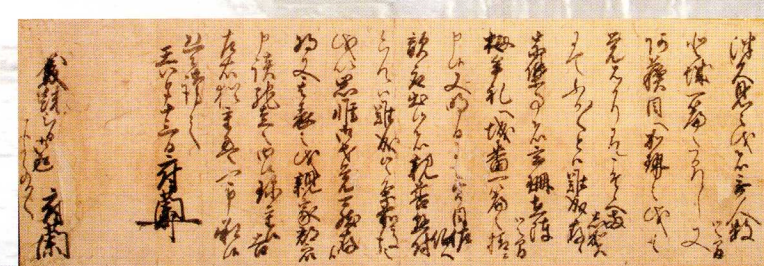
表紙について 大友松野家伝来「音無の轡」
おおともそうりん 大友宗麟の孫で、江戸時代熊本藩細川氏の家臣となった正照に始まる大友松野家に伝わった轡。轡は馬の口にかませ、馬を制御するための道具である。
おしよりとも 源頼朝が平氏打倒のため伊豆で拳挙した際に使用し、その後頼朝の近臣であった大友氏初代能直に与えられたという。代々大友家の家宝として受け継がれ、その後分家した松野家に伝来したと言い伝えられる。



足利直義軍勢催促状 足利尊氏の弟直義が右近将監に、南朝方の北畠顕家軍攻略のため奈良に進軍するよう命じた文書。右近将監の名字が削られているのは、大友氏宛でないことを隠すためであろう。



徳川家康御内書 徳川家康が、大友義統の長男大友宗五郎(義乗)にあてた、新年の贈り物への礼状。宗五郎は父義統が豊後国を没収された後、徳川家康に預けられており、両者の親密な関係をうかがうことのできる書状である。



大友府蘭(宗麟)書状・部分 島津氏が北部九州さらには豊後侵攻を本格化した1585年、大友宗麟が長男義統に宇目・佐伯方面の防備を十分行うよう指示した文書。この時宗麟は家督を義統に譲って13年ほど経っているが、息子を叱咤激励し、大友氏存亡の危機を乗り越えようと苦心していたことがよくわかる。